

年間第3 2 主日

マルコ 12・38-44

2015. 11. 7

カトリック高円寺教会
呉 大一(オ デイル)神父

今日の聖書のみ言葉のテーマは奉獻です。奉獻は洗礼を受けたすべての信者が守るべき6つの義務の一つです。日本の教会は韓国の教会と異なっているかもしれませんが、韓国の教会は信者が守らなければならない6つの義務を定めて守るように教えています。

- ①主日と教会が定めた義務祝日のミサに参列すること
- ②教会が定めた日に禁食齋、禁肉齋をすること
- ③少なくとも年に一度は赦しの秘蹟を受けること
- ④少なくとも年に一度は聖体拝領すること
- ⑤教会が定めた婚姻法を守ること
- ⑥教会の維持費を収めること

この中で、今日は奉獻について見てみましょう。

まず、奉獻は旧約の十分の一に由来します。レビ記 27・30 を見ると、「土地から取れる収穫量の十分の一は、穀物であれ、果実であれ、主のものである。それは聖なるもので主に属す」という言葉があります。この言葉通り、旧約のイスラエルの民は神の産物の十分の一をささげました。ところが、今日、果たして十分の一の規定どおり収入の十分の一を捧げる方がどの位いらっしゃるか疑問です。実際に収入の十分の一を神に捧げることは、大きな負担に近づくことです。もし十分の一を捧げた場合、わたしはどうやって食べて生きるのかという計算をする方もおられるでしょう。

しかし、十分の一は、単に金銭的なものだけに適用されるわけではないです。金銭的なものだけでなく、わたしたちに与えられた時間と命までも本来、神のものでした。したがって、奉獻とは、わたしのものの中からいくつかを神に捧げることではなく、本来、神のものを再び、神のもとにお返しするのを指します。マルコの福音書 12 章でも、人々がイエスに、「皇帝に税金を納めるのは、律法に適っているでしょうか、適っていないでしょうか」と尋ねられたとき、イエスは、「皇帝のものは皇帝に、神のものは神に返しなさい」と言われました。わたしたちは神に奉獻するのをもったいながってはいけません。

今日の第一朗読で、サレプタのやもめは食べるものがなくて飢え死になりそうなところだったのですが、食べ物を求めるエリヤ預言者に食べ物を作ってもてなしをしました。この時、エリヤ預言者は次のように言いました。「まずそれでわたしのために小さいパン菓子を作って、わたしに持って来なさい。その後あなたとあなたの息子のために作りなさい」。(列王記上 17・10-16)

人間的に考えると、まず自分と自分の息子のお腹を満たし、残ったもので隣人を助けてやるのが当たり前でしょう。しかし、エリヤは、まず自分のために食べ物を作らせ、やもめがエリヤの言う通りにすると、何と驚くべきことに、やもめの家に長い間食べ物が絶えませんでした。

このように、神様は、今日のわたしたちにも同様に言われておられます。「何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはみな加えて与えられる」。(マタイ 6・33)

一方、創世記 22 章で、神様がアブラハムに一人息子のイサクさえもいけにえとして捧げるようにと言われたとき、アブラハムの心境はどうだったでしょうか。年を取ってからようやく得た息子をいけにえとして捧げるようにとおっしゃった神様を薄情と思ったりしたものです。しかし、アブラハムは、息子も神様から与えられたものなので、神様のお言葉通り息子をいけにえとして捧げようとし、最終的には神様から多くの報いを受けることになったのです。

今日の福音でも、金持ちが見せびらかすために多くのお金を入れた一方で、貧しいやもめは自分の生活費であるレプトン銅貨二枚を入れました。これを見て、イエス様は弟子たちに、やもめが入れた献金は他の人の献金よりも多いと言われました。

ところで、自分の生活費のすべてを捧げたやもめの行動は一見無謀に思われるかもしれませんが、自分の生活費をすべて捧げてしまったら、今後どう生きて行くでしょうか。しかし、やもめは、このようなことに気にせず自分のお金をすべて捧げたのです。やもめがこのように行うことができたのはどんなわけがあったのでしょうか。

やもめは、何よりも神様が自身に施してくださったことについて感謝しなければならぬということを知っていて、また、神様が今まで面倒みてくださったように、今後も自分の面倒見てくださることを固く信じていたからです。だから、たとえ外的にはまだ貧しくても、内的には、心が豊かであったのです。

このように、自分が受けたことに感謝することができる人こそが、真に奉獻することができます。実際に、わたしたちに与えられたすべてのものは、神様

から受けたものです。なのに、わたしたちは何を惜んでいるのでしょうか。わたしたちは、愛する人に使うお金はいくらたくさん使っても惜しくはありません。したがって、わたしたちが神様を本当に愛しているのなら、神様に奉獻することを絶対にもったいないと思うことはないでしょう。

ところが、神様は何よりもわたしたちの真心をこめた心を望んでおられます。したがって、「わたしが求めるのは憐れみであって、いけにえではない」（マタイ 12・7）という御言葉のように、わたしたちの真心がなく多くのお金を献金するより、少ないお金であってもわたしたちの真心がこもった奉獻をする必要があります。そして、最も真の奉獻はまさにわたしたち自身を奉獻することであることを悟らなければなりません。

そうすると、わたしたちは金持ちとやもめの中でどっちにより近いですか。自分が持っていることにどのくらい満足しながら生きていますか。いくらたくさんのお金を持っている金持ちであるといっても、自分の人生に満足していなければ、その人は不幸な人です。韓国のコットンネに行くと、「物乞いして食べることができる力さえあったら、それは主のお恵みです」という文字が岩に書いてあります。この言葉に照らして見れば、わたしたちはあまりにも幸せな人です。満足しなければ感謝することができないし、感謝する人だけが施しを行うことができます。毎日、主がわたしたちに与えてくださるお恵みに感謝し、わたしたちが受けた主のお恵みを隣人と分かち合うことができるように努力しましょう。

（注）韓国のコットンネ：カトリック社会福祉複合施設「コットンネ共同体」